

令和7年 稲作情報 第1号

令和7年3月25日発行 宮城県亘理農業改良普及センター

電話 0223(34)1141 FAX0223(34)1143 ホームページ <http://www.pref.miyagi.jp/site/wrnk/>

I 令和7年産米に向けて

1 土づくり

堆肥や土づくり肥料（ようりんやケイカル等）を施用し、地力を高め、稲体や根の活力を高め、穂揃期まで葉色を維持しましょう。

2 晩期栽培、晩生品種等による品質向上

ひとめぼれ、だて正夢等中生品種の晩期栽培（田植え5月15～25日）、晩生品種（つや姫）の利用により出穂期を遅らせ、高温登熟を回避しましょう。

注)乾田直播では、天候によって移植栽培と出穂期が同じになることがあります。

3 適正な栽植密度、肥培管理

籾数過剰で発生する乳白粒の抑制に向け㎡当たり籾数2.8～3万粒を目標に、ほ場に合った栽植密度、植付け本数を設定しましょう。

登熟後期の窒素不足により発生する背白粒や基部白粒の抑制に向け、減数分裂期追肥をするなど穂揃期の葉色を下げないようにしましょう。

4 適切な水管理

出穂後の高温条件下では白未熟粒や胴割粒の発生を軽減する飽水管理をしましょう。

※飽水管理とは・・・自然減水で田面の水がなくなり、溝や足跡の底に水が溜まっている箇所が見られるようになったら、かん水する水管理のこと。

5 病害虫の防除対策

(1)いもち病

箱施用剤の施用量を順守し、予防防除に努めましょう。あわせて、ほ場をよく観察し、必要があれば、本田での防除を行いましょう。

(2)紋枯病

減収率5%を許容水準とすると、要防除水準は、穂ばらみ期の発病株率が中生品種で15%程度、晩生品種で20%程度です。防除水準を確認しながら、必要に応じて薬剤防除を実施しましょう。

(3)斑点米カメムシ類

箱施用剤の施用量を順守しましょう。地域一斉の草刈りは効果的です。また、ほ場内にヒエやイヌホタルイなどの残草が無いようにしましょう。

クモヘリカメムシ等が発生している地域では、本田の追加防除も検討しましょう。

6 適期収穫

ひとめぼれ、だて正夢の収穫期の目安は出穂後の積算平均気温1,000℃となった頃です。積算平均気温と合わせて、籾の熟色、籾水分等から総合的に判断し、適期刈取りに努めましょう。

Ⅱ 水稻育苗のポイント

1 浸種

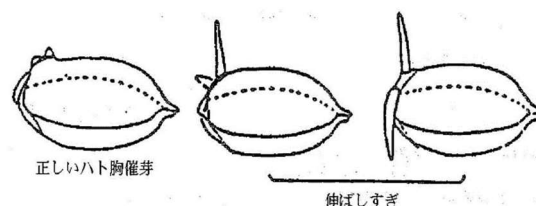
- ・積算水温の目安は、表のとおり。
10℃前後の水温でゆっくり浸種します。
水換えは2～3日ごとに行います。

表. 浸種積算気温の目安

積算水温	100℃	110～120℃	120℃
品種	ササニシキ みやこがねもち	つや姫	ひとめぼれ だて正夢 金のいぶき まなむすめ げんきまる

2 催芽

- ・催芽はハト胸程度とし、伸びすぎないように注意しましょう。
- ・ばか苗発生抑制と細菌性病害の予防のため、30℃付近で行いましょう。



3 田植日から逆算した播種日

- ・3月下旬～4月上旬は低温に遭遇する危険性が高く、無加温育苗の場合、出芽不良につながります。出芽を揃えるために、4月中旬以降に播種し、育苗期間の温度を確保しましょう。
- ・出穂期が7月末から8月初めとなりやすい5月の連休田植は、7月中・下旬の低温による障害不稔や8月の高温登熟による品質低下を招く危険性が高まりますので、8月10日頃に出穂期となるよう4月中旬以降に播種し、晩期栽培（田植え5月15～25日）にしましょう。

苗の種類と播種日の目安

苗の種類 (葉令)	乾燥籾(g)	催芽籾(g)	田植日	田植日から逆算した播種日の目安	
				加温出芽	無加温出芽
稚苗 (2.1～2.5葉)	160～180	210～240	5月10日	4月20日(田植20日前後)	4月15日(田植25日前後)
			5月15日	4月27日(田植18日前後)	4月22日(田植23日前後)
			5月25日	5月10日(田植15日前後)	5月5日(田植20日前後)
中苗 (3.5～4葉)	100～120	130～160	5月10日	4月10日(田植30日前後)	4月5日(田植35日前後)
			5月15日	4月17日(田植28日前後)	4月12日(田植33日前後)
			5月25日	4月30日(田植25日前後)	4月25日(田植30日前後)

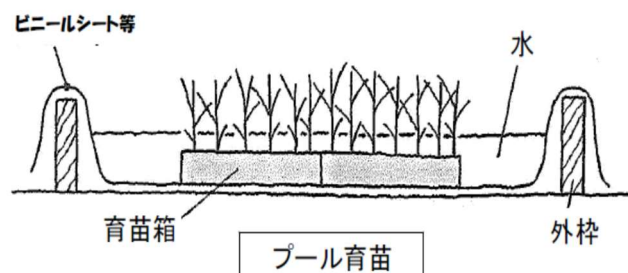
4 育苗期間中の栽培管理

	稚 苗（葉数 2.1～2.5 枚）		中 苗（葉数 3.5～4.0 枚）
	加温出芽	無加温出芽	無加温出芽
出芽	◎細菌病予防のため、温度は 30℃を超えない ようにし、芽長を覆土上1 cm 程度に揃える。	○半遮光性の保温シート・フィルム（シルバーポリトウ等）を箱全面にべた張りし、周囲はすきまがないように押さえる。	○半遮光性の保温シート・フィルム（シルバーポリトウ等）を箱全面にべた張りし、周囲はすきまがないように押さえる。
緑化	○床土は十分湿っているの で、基本的にはかん水しない。 ○適度な遮光性と通気性のある資材（ラブシート等）を2～3日べた掛けする。 ◎目標温度は昼間25℃、夜間10℃程度で、5℃以下の低温予想時は十分な保温対策を実施する。	○被覆資材は、第1葉が展開し第2葉が抽出し始める頃に除覆する（早めに除覆するとその後の苗の生育が大幅に遅れる）。	○被覆資材は、出芽揃い時に除覆する。
硬化	◎目標温度は昼間20～25℃、夜間10℃程度。		
	○かん水は、午前中の早い時間にたっぷりかける。 ○葉色が淡くなる頃（1.5葉期頃）に、箱当たり窒素成分で1 gを追肥する。 ○田植え5～7日前頃から、低温時を除きハウスを開放し、外気に慣らす。		○かん水は稚苗と同じ。 ○葉色を見ながら、肥切れ症状が見られたら、箱当たり窒素成分で1 gを追肥する。 ○ゆっくりと短めに育つように、1.5葉期頃からハウス適宜開閉し、温度調節する。 ○3葉期以降は、夜間10℃以下の低温を除いて、ハウスを解放する。

●プール育苗法

ハウス内などに遮光性のポリフィルムなどを敷いて作ったプールで、水耕に近い状態で箱育苗を行う方法です。かん水や温度管理などが大幅に軽減され、作業時間も節減できます。また、苗立枯細菌病や苗立枯病の発生も少ないです。

- ① 置き床を水平に（高低差が1.7cm以下）します。大きなプールが作れない場合は、小ブロックのプールにしても良いです。
- ② 育苗箱を設置するときは、プールの周縁から5cm程度離して並べます。
- ③ 根張りがよく箱下に根が貫通するので、箱内に根が貫通しにくい敷き紙をしてください。
- ④ プールへの入水は、被覆資材を除覆する第1葉が展開し第2葉が抽出し始める頃で、床土の高さまで入水します。2葉以降は苗の草丈の半分程度までかん水します。苗の草丈の半分程度までしっかり入水することで、カビの発生を防ぎます。
- ⑤ 慣行育苗よりも草丈が伸びやすいので、低めの温度で管理します。霜や低温注意報が出された場合を除き、原則、昼夜ともハウス側面は解放します。
- ⑥ 田植え2日程度前にプールの水を排水しておく、と、運搬作業が楽になります。



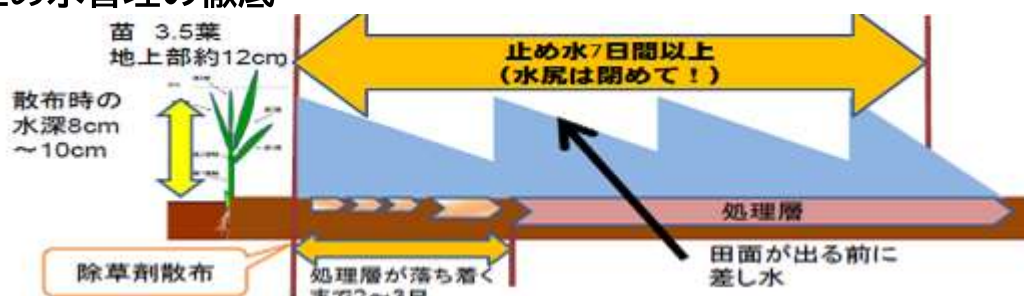
5 育苗期の病害対策

育苗期の病害は、発生してからの防除では効果が低いので**予防防除が基本**となります。菌（カビ）、細菌が増えにくい環境づくりと管理が大切です。

主な病害		病 徴	主な発生要因	主な予防対策
ばか苗病		第1葉鞘、新葉が徒長し、淡緑色となる。根数は少ない。	罹病種子の使用 種子消毒の不徹底	健全種子を使用する。 塩水選、種子消毒の実施。
もみ枯細菌病		発生は坪枯れ状。新葉が葉鞘を破って中途からねじれながら出葉する。芯は腐敗し、容易に抜ける。	罹病種子の使用 種子消毒の不徹底	健全種子を使用する。 塩水選、種子消毒の実施。
苗立枯細菌病		初期症状はもみ枯細菌病と酷似しているが、芯は腐敗せず抜けない。	催芽、出芽時の高温	催芽、出芽温度が高温にならないようにする。
苗立枯病	フザリウム属菌	地際部及び根は褐変。地際部に白いカビや粉を中心に白～淡紅色のカビが発生。	緑化開始後まもない頃の低温 pH5.5 以上の畑土壌	床土をpH5前後にする。 タチガレエース粉剤の床土混和、タチガレン液剤のかん注。
	ピシウム属菌	地際部の褐変はやや淡く、水浸状。地際部にカビは見られない。	緑化期以降（硬化中～後期でも）の低温 pH5.5 以上の畑土壌	適正な温度管理。 タチガレエース粉剤の床土混和、タチガレン液剤のかん注。
	リゾプス属菌	緑化開始時に箱全体が白いカビで覆われる。棒状、球状の異常根が見られることもある。	出芽時の高温多湿	出芽温度に注意する。 ダコニール 1000 やダコレート水和剤の播種時かん注。
	トリコデルマ属菌	地際部や根のまわりに青緑色のカビの塊が見られる。	保水力が小さく pH4以下の土壌	床土をpH5前後にする。 ダコレート水和剤の播種時かん注。

6 効果的な除草剤の使い方

(1) 止め水管理の徹底



- ・代かき丁寧に行い、水田表面を均一にする。
- ・水深 5cm 以上を確保し田面を出さない。7 日間は落水しない。＝除草剤の処理層をしっかり作る。
- ・差し水は処理層を壊さないようにゆっくりと入水する。

(2) 雑草葉齢の確認

多くの除草剤では使用時期はノビエの葉齢が目安になっています。イヌホタルイが多発しているほ場では、イヌホタルイが2葉期までに散布しましょう。

